



Contents

- キリスト教講演会（前期）
若松賤子と樋口一葉
— 『女学雑誌』の果たした役割
- スタディツアー報告
- チャペルサービス報告

人間と人間を結ぶきずな

相澤 一（大学チャプレン）

こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。（エフェソの信徒への手紙第1章10節）

今年は戦後79年で、戦争を実際に経験した世代の人は次々と亡くなられています。しかしその一方で、戦争の記憶の伝承の努力も、戦争を直接経験していない世代によってされています。9月にゼミの合宿で、学生たちと一緒にグアム島に行きました。グアムという多くの人はリゾートを思い浮かべるでしょうが、太平洋戦争中に日本軍とアメリカ軍の激闘が繰り広げられた地でもあります。現在でもグアム島には当時の戦跡が数多く残されており、ガイドさんの案内で島内の戦跡を巡りました。学生たちにとっては楽しい時間ではなかったかもしれませんが、こういうことは続けなければならないと思っています。

森有正という思想家・フランス文学者が、「人間と人間を結ぶ絆」という文章を書いています。これは『きけ わだつみのこえ』という、戦没した学徒出陣兵たちの遺書を集めた本の書評であり、その中で森は、この本を読んだ人々から「彼らの死を犬死ににしてはならない」という声が寄せられていることを紹介しています。

しかし森はそれに対して、「私たちは死者を利用しているのではないか？」という、恐ろしい問いを發します。森はこう言います、「この人々（学徒兵たち）の死を犬死にに終わらせてはならないと言う人々があります。私はその気持ちがよく判りますし、私自身も及ばずながら、そう考えます。しかし他方から考えれば、それはまた何と白々しい言葉で

はないでしょうか。どんなに立派な社会を作ってみても、彼らはすでに死んでしまっていて、生きていないのです。この空隙をどうすることが出来るのでしょうか。」

もし私たちが「彼ら学徒兵の死を無駄死ににしてはならない」と考え、努力して、戦争のない、豊かで平和な世界を作り上げることができたとしても、しかし、学徒兵たちは、その世界を楽しむことはできません。彼らは死んで、もうこの世にいないのですから。楽しむことができるのは、今生きている私たちだけなのです。ですから、「彼らの死を無駄死ににしてはならない」といった言葉を軽々しく口にするべきではない、と森は警告をしています。

しかし森は、さらに続けて、こうも言います、「私どもが『きけ わだつみのこえ』を前にして、あの人々の死を犬死ににたらしめてはいけないと思ったり言ったりすることは、私ども自身まだ十分に発見していない、全人類を結びつけるなにかある偉大な紐帯（絆）を象徴しているのではないのでしょうか。私どもは、今それが何であるか現実においては知りませんが、私どもはみなそれに向って憧れているということ出来ると思います。」

キリスト教に、アナケファライオーシス（万物の再統合）という思想があります。キリスト教は、いつの日か「あらゆるものが……天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられる」と信じます。もちろん、信じていない人もいますでしょう。しかし、信じる人たちも信じない人たちも、一緒に「彼らの死を犬死ににしてはならない」と強く思い、よりよい社会を目指して、ともに努力していくことができるなら、そこには「全人類を結びつける絆」があらわれているのではないのでしょうか。

若松賤子と樋口一葉 —『女学雑誌』の果たした役割—

佐藤 裕子（フェリス女学院大学名誉教授）

今日は、フェリス女学院の第1回卒業生で、近代児童文学史上不朽の名作フランシス・バーネットの『小公子』の翻訳者として名高い若松賤子の思想と業績、そして彼女が同時代の文学者たち、とりわけ樋口一葉に与えた影響について、『女学雑誌』を手掛かりとして、短い時間ではありますが一緒に考えて見たいと思います。

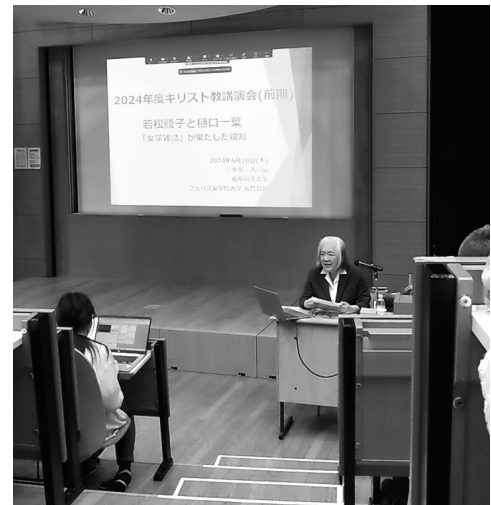
若松賤子は元治元年（1864）3月1日に生まれました。父は会津藩士・松川勝二郎正義。幕松の混乱の時期で、年齢では森鷗外の2歳年下、夏目漱石の3歳年上、そして樋口一葉の8歳年上となります。若松賤子が4歳、慶応4年は、鳥羽伏見の戦い、いわゆる戊辰戦争が始まった年で、会津は凄惨な市街戦に巻き込まれ、賤子たち母子も山野を転々と逃げ回ります。賤子は戦争難民になってしまいます。

この難民の子が「神の恵み」に直接関わることになるのに大きな役割を果たしたのが、横浜の生糸貿易商・山城屋の番頭、大川甚兵衛でした。当時、外国貿易の中心として急速に発展しつつあった横浜にある山城屋の大川甚兵衛の養女としてもらわれてきたのが明治3年（1870）賤子7歳の時のことです。会津の武士の家庭に生まれ、幕末の混乱の戦禍の巷の中から抜け出て、いきなり開放的な横浜の活気に触れるのです。のみならず、甚兵衛はこの少女を「キダーさんの学校」に入れました。「学校」そのものがまだ珍しい時代で、しかもこの「キダーさんの学校」は当時横浜居留地39番地のヘボン施療所の中にありました。

この「キダーさんの学校」こそ、後のフェリス・セミナリー、つまり現在のフェリス女学院の前身であり、若松賤子は第1回の優れた卒業生となる栄光を担うのです。そして明治9（1876）年、12歳の時、横浜海岸教会で受洗します。明治15年（1882）、フェリスの高等科を卒業した賤子はそのま母校の講師となります。18歳の時のことです。そして当時、一世を風靡していた『女学雑誌』の主催者・巖本善治と結婚したのが明治22年（1889）。

善治26歳、賤子25歳の時でした。二人の出会いは明治18年（1885）、巖本善治が「基督教新聞」の編集にも関わっていた時に賤子が翻訳の手伝いをするようになったことから、共に女子教育と婦人問題のために尽力する精神に共鳴した結果、結婚するに至ったと、後に巖本善治は語っています。今日の1つ目のポイント『女学雑誌』が登場しました。『女学雑誌』は明治18年（1885）7月から明治37年（1904）2月まで、526号、計548冊刊行された日本初の本格的な女性雑誌です。巖本善治が編集長として方針を定め、明治22年（1889）前半までは女性への啓蒙的内容、明治22年後半からは文芸作品を多く掲載するようになります。

女性作家の登竜門的存在でした。若松賤子と巖本善治が結婚したのが明治22年のことから、編集長の巖本善治は明らかに翻訳家で児童文学者で小説家でもあった妻・若松賤子の強い影響を受けて、『女学雑誌』の内容を大きく変更し



ていったということになります。

若松賤子も巖本善治を手伝い、編集に参加し、結婚前から求めに応じて様々な原稿を寄稿していましたが、さらに日本初となるキリスト教児童文学を次々と翻訳し、『女学雑誌』に発表していきました。巖本善治はフェリスと同じキリスト教系の「明治女学校」の創立にも関わり、明治25（1892）年2代目の校長となります。妻の若松賤子も英語を教え、また『女学雑誌』に寄稿していた星野天知、北村透谷、島崎藤村、馬場胡蝶、戸川秋骨らも教鞭を取っています。ここに名前を挙げた人々は、クリスチャンで、まさに近代日本の文学界をリードした新進気鋭の詩人や小説家たちです。そして明治26（1893）年、星野天知、戸川秋骨、島崎藤村らが『女学雑誌』を離れ、『文学界』を創刊し、新しい時代が幕を開ける訳です。

さて話を若松賤子と巖本善治の結婚に戻しますが、この時、賤子は結核を患い、善治と婚約が整った時、すでに何度か喀血をしているような状態にありました。結核はいくまでもなく、当時最も忌み嫌われていた病気の一つで、不治の病でもありました。このような、条件としては最悪の状態にあったはずの賤子と善治の出会いは、それらの不利な条件を吹き飛ばしてしまうような、より深い魂と魂の結び付きであるといえるでしょう。この時、賤子は次のような英文の詩を夫となった善治に捧げています。「THE BRIDAL VEIL」という英詩です。『女学雑誌』172号に掲載されたもので、当時は、若松賤子を作ったものと考えられていましたが、比較文学者の諸岡愛子氏により、アメリカの詩人アリス・ケアリーの作品であることが判明しています。この「花嫁のベール」は、若松賤子を論ずる上でも、また日本近代詩の歴史を考える上でも、非常に革新的でユニークなものであると言えるのですが、まず花嫁から花婿に贈られるという形も異例ですし、今回の

資料では第1連のみを挙げましたが、ここでは自分が花嫁である前に、夫からも独立した一人の人格であることを、高らかに宣言しているからです。時間があれば、一行一行吟味してゆきたいのですが、時間の関係で二つだけ取り上げます。

まず第一行目。「you think you have won me」の「won/win」という単語。「勝ち得る」「勝ち取る」という意味ですが、何を勝ち取るかということ、この詩の中に登場する「I=私」なのですが、女性は物ですか？まずこの単語で「はて？私は物なのか？」とカチンときます。次にこの詩には「look」という単語が2回出てきます。2行目「Well, take this white veil and look on me.」、そして9行目「Look close on my heart—see the worst of its shining」の2か所です。何を「見て下さい」と言っているかということ、「私の魂のその輝きの最も悪しきところを見て下さい」というのです。ここに賤子がこの詩を選んだ重要なポイントがあります。結婚を前にした花嫁が、「自分の最も綺麗なところ」、「魂の最も美しい輝き」というありきたりの表現ではなく、花婿に対して、美しい所も、醜い所も全て、私の全人格を受け入れてほしいというのです。私はあなたの所有物ではない、あなたのものではない、私はあなたと直接向き合いたいのですという、新婚の花嫁は究極の「愛する魂の詩」を夫に捧げたのです。これこそ、敬虔なキリスト教徒のこれ以上ない信仰告白であり、「愛する」ということと真摯に向き合った一人の女性の魂の叫びであるといえましょう。結婚すること、条件でもなく、あるいは強制されたものでもなく、何よりも魂と魂の結びつきであると考えた稀有な女性が、フェリス女学院の第1回の卒業生なのです。

フェリス女学院大学名誉教授の鈴木美南子先生は、若松賤子の教育者としての姿勢を次のように語っています。重要な箇所に棒線を引きました。

「その頃、彼女の女子教育論は基本的にすでに善治と同質のものであり、従来のゆがめられた男女の関係ではなく、女性も男性と対等な人格性と権利をもつものとして、その真の地位と尊厳を得るべく同様の教育、可能な最高の教育によって知的道徳的に進歩しなければならない。そして、主として、妻たり母たる者として子女教育や家庭を通じて社会の改善にかかわるべきものというものである。また、家事だけが女性の仕事と考えるのではなく、必要と能力のある女性はそれ以外の仕事をもつべきであり、従来の因習的な婦徳は新しい時代には通用しないと考える。特に教育を受けた女性はその特権を一身の益としなくて、公益に参加すること、とりわけ文学・知的活動、ペンの力によって社会の向上と浄化に取り組むことこそ崇高な務めであるという。この（若松賤子の）教師時代の信念は、まさに自分自身が選んだ道であり、そこには女子教育観のみならず、後の文学活動を支える姿勢も見ることができる。」（『あゆみ』第33号、1994年、フェリス女学院資料室）

賤子は、フェリス女学院でも明治女学校でも「必要と能力のある女性はそれ以外の仕事をもつべき」と考えて、教え子に伝えました。そして自ら、実践します。当時、これは非常に画期的な考え方でした。仕事には当然、報酬が与えられます。女性が結婚相手に頼らずに、自分の力で生きて行くことが出来るということです。

ここで今日のお話の2つ目のポイント、樋口一葉が登場します。樋口一葉は、『女学雑誌』の読者でした。『一葉日記』の明治24（1891）年6月の段で初めて「女学雑誌」の名が出てきます。一葉は中島歌子の歌塾「萩の舎」で学んでいて、同じ門弟の前島さく子から『女学雑誌』を借りて読んでいたものと考えられています。若松賤子の名を一躍有名にしたバーネットの『小公子』の翻訳は『女学雑誌』に明治23年8月から連載されていましたから、当然のことながら一葉は賤子の『小公子』の翻訳を読んでいます。それだけではなく、

く、賤子はテニソンの翻訳『イノック・アーデン物語』や、婦人問題、家庭改良、女子教育などのエッセイ、また毎号、女性・宗教・日本文化・時事問題に関する英文の記事も書き続けています。一葉は、この若松賤子の思想に強く影響を受けています。とりわけ「必要と能力がある女性は仕事をもつべき」という考えに強く共鳴し、明治22年に父親と兄を相次いで亡くした一葉は、母と妹と自分も含めて、家族の生計を立てるため・生きていくために、小説を書き続けるのです。一葉が「埋もれ木」という作品で初めてもらった原稿料が11円75銭と言いますから、現在の貨幣価値に直して11万円程度でしょうか。先ほど、明治26年に島崎藤村らが中心となって『女学雑誌』から独立して『文学界』という雑誌が創刊されたことをお話しましたが、一葉は明治27年12月に「大つごもり」を『文学界』に、また翌明治28年1月から「たけくらべ」を7回にわたり『文学界』に発表しています。そして明治29年『文章倶楽部』に「たけくらべ」が一括掲載されると森鷗外や幸田露伴から絶賛されます。まさに『女学雑誌』を母体として生まれた『文学界』という雑誌が、小説家・樋口一葉の中心的な活動の場となった訳です。しかし残念なことに同じ年（明治29年）11月23日、一葉は24歳の若さで亡くなります。死因は若松賤子と同じ結核。実は若松賤子も、明治29年2月5日、明治女学校が火災で焼失し、肺結核で病床にあった賤子は病状が急変し、2月10日心臓麻痺で急死します。若松賤子と樋口一葉は、日付こそ違うものの、奇しくも同じ明治29年に亡くなっているのです。若松賤子の訃報を聞いて、樋口一葉が詠んだ歌です。「とはばやと思ひしことは空しくて今日のなげきに逢はんとやみし」（その人の元を訪ねてお目にかけたいという願いは実現せず、その人の死の知らせ（＝今日のなげき）に接することになるうとは、思ってもみなかった）というのです。

樋口一葉に絶大なる影響を与えた若松賤子は、まず母校であるフェリス女学院と、結婚後は明治女学校で教壇に立ち、その傍ら、夫である巖本善治の主宰する『女学雑誌』に近代児童文学史上不朽の足跡を残した『小公子』の翻訳、さらに婦人問題・女子教育・家庭改良などのエッセイを次々と発表しました。賤子自身が、妻であり、母であり、教育者であり、翻訳家であり、小説家であり、思想家でもあるという、彼女自身の思想を体現した生涯を送りました。そして8つ年下の樋口一葉に大きな影響を与え、近代日本文学史上、初めての職業作家である樋口一葉誕生を支えたのです。

会津若松に今も保存されている賤子の生家に黒御影石の文学碑が立っていますが、そこには

私の生涯は神の恵みを
最後まで心にとどめた
というより外に
語るなにもものない

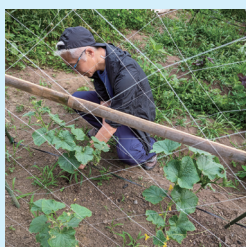
という言葉が刻み込まれています。

賤子の墓地は東京染井霊園にあり、墓碑銘はただ「賤子」の文字だけ。自分のことに関しては伝記等一切無用である、墓も「賤子」の一字以外、全ての言葉はいらないという遺言に従ったものでした。この賤き子「賤子」の意味は、色々に理解されますが、大切なのはやはりキリスト教徒として、「神の前に賤き子」という確実かつ揺るぎなき信仰によるものであったように思います。以上、若松賤子の思想とその業績、そして若松賤子から多大な影響を受けて、職業作家として自分一人の力で家族を養い自立した樋口一葉、そして明治の文学界に多大な影響を与えた『女学雑誌』について、駆け足ではありますが考えた次第です。

※講演会当日は、アリス・ケアリーの英詩とその翻訳をはじめ、参加学生に資料が配布されている。

2024年度 アジア学院スタディツアー報告 アジア学院スタディツアーへ参加して F・S（文学部英語英米文学科3年）

6月15日、16日に行われたアジア学院スタディツアーでは、世界中から集まった人たちの暮らしを見て、体験し、共に過ごすことで私たちが生きるために欠かせない「食べ物と命」について考えました。アジア学院では、動物や野菜など、自分たちで育て、それらを調理し食事をします。ツアーでは育てている鶏や豚を見て、またその鶏が生んだ卵を食べられるようにきれいにしました。何気ない作業ですが、その卵が食事に出てきて実際に口に運ばれるとき、この卵がどこから来たのか知っているからこそ、命に感謝し食べることの喜びをかみしめました。トークセッションでは生徒（研修生）の方々と、アジア・アフリカの食糧問題について話し合いました。アフリカでは気候の問題などにより農業が難しいため、アジア学院で農業を学びに来ているとおっしゃっていて、今の自分の生活を振り返ることができました。最終日の昼食で、葉っぱのお皿でバーベキューをした体験はとても貴重で時間がゆっくり流れていたような気がします。アジア学院では、大自然の中で様々なバックグラウンドを持った人たちと生活することで、人とも、食べ物とも「共に生きる」が実現できる場所だと思います。短い期間でしたが、命の大切さを十分学べたとても充実した2日間でした。



フェリス女学院大学のチャペルサービス

フェリス女学院大学では、お昼休みの時間にチャペルサービスを実施しています。

緑園キャンパスでは、毎週（月）～（金）12:20～12:40にチャペルで、山手キャンパスでは、毎週木曜日12:30～13:00にフェリスホールで礼拝が行われています。

先生方や職員、また学生による礼拝説教・奨励だけでなく、奏楽や司会などに多くの学生が携わっています。今年度より、「聖書朗読と音楽の礼拝」「聖書のみ言葉と祈りの礼拝」など、さまざまな形態の礼拝がはじめられたこともあり、特に、今年度は奏楽奉仕の学生が増え、パイプオルガンによる奏楽だけでなく、ピアノ、バイオリン、ギターなどを用いて奉仕しています。

チャペルサービスは、どなたでも自由にご出席いただけます。キリスト教に信仰のある方はもちろんですが、学生からは、チャペルサービスに参加したことをきっかけに、キリスト教や礼拝に関心をもち始めた、という声も聞かれます。

キリスト教の精神によって建てられたフェリス女学院は、今なお神様に守られ、その精神は恵みのうちに脈々と受け継がれています。

